

追手門学院大学  
心理学論集第27号抜刷  
2019年3月31日発行

原 著

心的外傷後成長に影響を与える諸要因の検討  
— 宗教的行動および年齢と性別の影響 —

頭 師 有 里

(心齋橋スリーアロークリニック)

A Study of Factors on Posttraumatic Growth  
— Influence of Religious Behavior, Age and Sex —

Yuri Zushi

(Shinsaibashi Three-Arrow Clinic)

## 心的外傷後成長に影響を与える諸要因の検討 —宗教的行動および年齢と性別の影響—

頭 師 有 里

(心齋橋スリーアロークリニック)

### A Study of Factors on Posttraumatic Growth — Influence of Religious Behavior, Age and Sex —

Yuri Zushi

(Shinsaibashi Three-Arrow Clinic)

Key Words : posttraumatic growth, IES-R-J, religious behavior

#### 問題と目的

1990年代から、こころに深い傷を負うような重大な出来事やストレスフルな出来事を動因とした人格的成長のような現象に関する研究が数多く見られるようになってきている。例えば、死別体験というつらく苦しい出来事を経て得られるポジティブな心的変化 (e.g. Yalom & Lieberman, 1991)、HIVを保有する研究協力者が近親者のAIDSによる死別を体験して導かれた意味の発見 (e.g. Bower et al., 1998)、癌で亡くなった患者の近親者を対象とした研究から提案された有益性の発見 (e.g. 坂口, 2002) のように、喪失体験や非常に強いストレスを感じる出来事の経験がポジティブな心的変化を引き起こすという可能性について言及している。一方、Park et al. (1996) は、生命にかかわる出来事だけでなく日常生活におけるストレスフルな出来事からもポジティブな心理的変容が見られるというストレス関連成長 (stress-related growth) を提案した。また、Tedeschi & Calhoun (1996) は、ストレス関連成長より深刻な危機や非常に強いストレスを感じる出来事の後に生じるポジティブな心理的変容を対象とするPosttraumatic Growth (心的外傷後成長：以下、PTG) の概念

を提案し、それらを測定するPosttraumatic Growth Inventory (心的外傷後成長尺度：以下、PTGI) を開発した。そして、後にPTGの理論モデルを構築した (Tedeschi & Calhoun, 2004)。PTGは、非常に困難な人生上の危機、あるいはトラウマになるような出来事やストレスフルな出来事とのものがきから生じるポジティブな心理的変容の体験のことであり、結果であり過程であると定義されている (Tedeschi & Calhoun, 2004)。PTGで扱われる心的外傷とは、心的外傷を与える出来事だけでなくストレスが強く感じられる出来事も含むところに特徴があり、ある出来事に対して主観として、その衝撃の強さをどのように体験したかに注目しているといえる。

これまでPTGIはさまざまな言語に翻訳され (e.g. Weiss, T., & Berger, R., 2006; Powell et al., 2003; Taku et al., 2007)、PTGと諸変数との関連性が研究されている。例えば、The Neo Personality Inventory の神経症傾向以外の因子 (外向性、経験への開放性、調和性、誠実性) との関連性 (e.g. Tedeschi & Calhoun, 1996)、「死別」とPTGIの下位尺度の1つである「精神的 (スピリチュアルな) 変容および人生に対する感謝」との関連性 (e.g. Taku et al., 2007) 等が報告されている。

年齢とPTGに関する研究では、PTGは年齢の影

響を受けないという見解がある (e.g. Tedeschi & Calhoun, 1996)。その一方で, Powell et al. (2003) は, 旧ユーゴスラビア地域での戦争体験者を対象とした調査において年齢の影響が強いことを報告している。また, がん患者を対象とした年齢層とPTGの研究において, 12の研究は有意な結果を示さなかったが, 7つの研究では有意な負の相関があり, 若年成人のがん患者のほうがより高いレベルのPTGを示したとの報告がなされている (Calhoun & Tedeschi, 2006)。

性別とPTGに関する研究では, ト라우マになるような出来事や強いストレスを感じた出来事後, 男性より女性のほうがよりポジティブな心理的変容を示すことが報告されている (e.g., Tedeschi & Calhoun, 1996)。一方で, PTGにおいて性差が認められないという報告もなされている (e.g., Powell et al., 2003; Taku et al., 2007)。Taku et al. (2007) は, 男性より女性の信仰心が強いという西洋での見解から, 日本においても性別がPTGに影響を及ぼす可能性を示唆している。しかし, 日本人は「宗教観の性別役割期待」の存在によって男性よりはるかに女性の方が信仰を持っていることが指摘されており (金兎, 1997), Taku et al. (2007) の見解と一致していない。これまで認識されてきた宗教的行動とは, 特定の宗教組織の一員となり, その宗教特有の活動を行うような西洋的なスタイルからの見解であると言える。一方, 日本人の多くは誕生するとお宮参りに出かけ (神道), 結婚するときには神の前で永遠の愛を誓い (キリスト教), 亡くなると仏になる (仏教) ように, 特定の宗教に縛られることなくさまざまな宗教とつきあうスタイルを持ち合わせている。このように, 大多数の日本人は一定の宗教を持たないが, 古来より日本人の生活には宗教が密接に関わっており (e.g., 佐竹ら, 2003), 西洋とは異なったスタイルで日本人特有の宗教観を持ち合わせていると考えられる。以上をふまえて, 本調査ではPTGにおける年齢と性別の影響と共に, 日本人の宗教観を表す宗教的行動を調査し, PTGにおける日本人の宗教的行動の影響についても検討する。

## 方 法

調査対象者: 大学生133名 (男性61名, 女性72名) と30歳以上の一般成人61名 (男性19名, 女性42名) であった。大学生の平均年齢は20.08歳 (SD=1.13), 年齢の範囲は18~23歳であった。一方, 成人の平均年齢は41.92歳 (SD=9.32), 年齢の範囲は30~62歳,

この内30代が49.2%, 40代が26.2%, 50代が18%, 60代が6.6%であった。また, 職を有する者が70.5%であり, 主な職業は, 会社員・公務員・保育士・自営業であった。成人に関しては大学院生の家族や友人に依頼し, 匿名性を確保するために個別の郵送にて回収を行った。

## 質問紙の構成

### ①危機体験に関する質問

過去5年の間に体験した危機の内容 (トラウマになるような出来事あるいは強いストレスを感じた出来事) について自由記述にて回答を求めた。先行研究 (e.g. Tedeschi & Calhoun, 1996) を参考に, 危機体験の衝撃度を測定するため, 体験直後の様子を想起しやすいと思われる過去5年以内の危機体験について回答するよう教示した。

また, 出来事を体験した時期について, 6か月以内, 6か月~1年前, 1~2年前, 2~4年前, 4~5年前から選択による回答を求めた。

### ②改訂出来事インパクト尺度 (飛鳥井, 1999: 以下, IES-R-J)

各調査協力者が体験した出来事の衝撃の強さを調査するために使用した。IES-R-Jは「再体験・侵入的想起」「回避」「覚醒亢進」の3つの下位尺度から構成されており, 質問の各項目は「全くなし」の0点から「非常に (あてはまる)」の4点までの5件法で回答を求めた。本尺度はテスト実施日を含めた7日間を振り返って回答を求めるとのであるが, 本調査では出来事の直接の衝撃度を測ることを目的として, 出来事を体験した時から約1週間を想起して回答するよう教示した。

### ③心的外傷後成長尺度-日本語版 (Taku et al., 2007: 以下, PTGI-J)

PTGI-J (Taku et al., 2007) は「他者との関係」, 「新たな可能性」, 「人間としての強さ」, 「精神性 (スピリチュアルな) 変容および人生に対する感謝」, の4つの下位尺度から構成されており, 各項目は「(これらの変化を) まったく経験しなかった」の0点から「(これらの変化を) かなり強く経験した」の5点までの6件法で回答を求めた。

### ④宗教的行動に関する質問項目

金兎 (1997) の「宗教行動の分布」を参考に11項目を筆者が独自に作成した。項目内容は, 御利益を求める行動に関するもの, 家庭内での慣習に関するもの, そして宗教特有の活動に関するものである。各項目は, 「全くない」の0点から「よくある」の3

点までの4件法で回答を求めた。なお、宗教的職能者が行うことがある占いは宗教色がみられると考え、質問項目に加えた。

## 結 果

本調査の協力者が自由記述にて報告した「体験した危機」についてTaku et al. (2007)を参考に分類してTable1に示した。6つのカテゴリーは、重病を患ったり犯罪の被害者になったり自然災害を体験したりするような“自己”に関するもの、いじめや関係の崩壊を含む“関係”，大学入試での失敗や学校生活での問題を含む，“学校・職場”に関するもの、家族や愛する人の死といった“死別”，親の離婚や別居あるいは家族の病気や事故等を含む“家族”に関するもの、以上に分類できないものが“その他”である。大学生の「体験した危機」の未記入は無効回答としたが、成人については教示が徹底できなかつた可能性が否めないため有効回答とした。

Table 1 体験した危機の分類

	(%)	
	大学生	成人
自己	28.6	21.3
関係	27.8	9.8
学校・職場	24.1	39.3
死別	12.0	8.2
家族	6.8	16.4
その他	0.8	0.0
未記入	—	4.9

本調査の大学生では、過去1年の間に体験した出来事の報告が約40%を占め、同時期の成人の報告は約30%であった。また、成人の1~4年前の出来事の報告が55.7%であったことから、大学生より成人の方がやや時間の経過した出来事を報告していることが示唆された。

### 世代と性別要因からみた出来事の衝撃度の違い

調査協力者が体験した出来事の衝撃度に対する世代と性別による違いの有無を検討するために、世代と性別を独立変数として2要因の分散分析を行い、その結果をTable 2に示した。

出来事衝撃度の総得点において交互作用は認められなかったが、性別に有意な主効果と世代の主効果に有意傾向が認められた(性別： $F(1,190)=10.96, p<.01$ , 世代： $F(1,190)=3.27, p<.10$ )。また、「回避」でも交互作用は認められなかったが、各群要因に有意な主効果が認められた(性別： $F(1,190)=5.40, p<.05$ , 世代： $F(1,190)=5.15, p<.05$ )。「再体験・侵入的想起」と「覚醒充進」においては、性別に有意な主効果が認められた(「再体験・侵入的想起」： $F(1,190)=13.51, p<.001$ , 「覚醒充進」： $F(1,190)=7.04, p<.01$ )。以上より、男性より女性の方が出来事の衝撃を受けやすく、成人より大学生の方がその出来事に関係するものを回避する傾向にあることが明らかになった。

Table 2 IES-R-Jに対する分散分析結果

	大学生		成人		世代 $F$ 値( $df=1,190$ )	性別 $F$ 値( $df=1,190$ )	交互作用
	男性	女性	男性	女性			
	N	61	72	19	42		
総得点(22項目)	29.84 (19.84)	40.22 (18.91)	24.42 (18.19)	34.48 (17.74)	3.27 †	10.96 **	0.00
再体験・ 侵入的想起	11.84 (8.76)	16.49 (8.12)	9.79 (8.31)	15.26 (8.50)	1.41	13.51 ***	0.09
回避	10.66 (6.93)	13.46 (7.21)	8.37 (5.57)	10.71 (6.29)	5.15 *	5.40 *	0.04
覚醒充進	7.34 (5.72)	10.28 (6.19)	6.26 (6.32)	8.50 (5.74)	2.15	7.04 **	0.13

注) ( )内は標準偏差, \*\*\* $p<.001$ , \*\*  $p<.01$ , \* $p<.05$ , †  $p<.10$

Table 3 PTG に対する分散分析結果

	世代		大学生		成人		世代	性別	交互作用
	性別	N	男性	女性	男性	女性			
総得点(18項目)			30.52 (21.08)	35.44 (22.88)	34.79 (17.00)	36.90 (17.83)	0.71	1.07	0.17
他者との関係			11.56 (8.43)	13.99 (8.95)	13.53 (7.40)	13.67 (6.62)	0.38	0.92	0.73
新たな可能性			7.82 (6.21)	8.26 (6.23)	9.63 (5.13)	7.57 (5.03)	0.34	0.71	1.70
人間としての強さ			5.79 (4.44)	7.67 (5.75)	6.47 (3.91)	8.19 (5.05)	0.54	4.75 *	0.01
精神的(スピリチュアルな)変容 および人生に対する感謝			5.36 (4.90)	5.53 (4.89)	3.16 (3.98)	5.38 (3.94)	2.42	2.50	1.85

注) ( )内は標準偏差. \* $p < .05$ 

#### 世代要因と性別要因によるPTGの違い

PTGにおける世代と性別の影響を検討するために、世代と性別を独立変数として2要因の分散分析を行い、その結果をTable 3に示した。PTGI-J総得点において、性別で有意な主効果は全く認められず、*t*検定によって性差が全く認められないとするTaku et al. (2007)の結果( $t(302) = 11, n.s.$ )と同様であることが示唆された。

#### IES-R-JとPTGI-Jの相関

出来事の衝撃度とPTGとの関係性を検討するためにPearsonの積率相関係数を算出したところ、IES-R-Jの総得点とPTGI-Jの総得点の間に正の相関が認められた(Table 4, 大学生: $r = .36, p < .01$ , 成人: $r = .31, p < .05$ )。また大学生において、すべての因子間で正の相関が認められたことから、出来事の衝撃度が高いほどPTGが高くなる傾向にあることが明らかになった。

Table 4 IES-R-J と PTGI-J の相関

PTGI-J	IES-R-J							
	総得点		再体験・侵入的想起		回避		覚醒亢進	
	大学生	成人	大学生	成人	大学生	成人	大学生	成人
総得点(18項目)	.36**	.31*	.34**	.28*	.28**	.26*	.35**	.29*
他者との関係	.36**	.22	.36**	.21	.27**	.09	.35**	.29*
新たな可能性	.39**	.21	.38**	.20	.29**	.15	.41**	.20
人間としての強さ	.22*	.17	.19*	.15	.19*	.17	.22**	.11
精神的(スピリチュアルな)変容 および人生に対する感謝	.25**	.42**	.24**	.36**	.20*	.44**	.23**	.32*

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ 

#### 宗教的行動尺度の因子分析

大学生における宗教的行動尺度の因子構造を明らかにするために、回転方法や指定因子数を変えるなどして探索的に検討したところ、主成分分析によるバリマックス回転での結果が最も適合しているよう

に思われた。大学生の結果と同様に、成人における宗教的行動尺度の因子分析でも、3因子構造が認められ、11項目すべてを宗教的行動尺度とした。宗教的行動尺度の因子分析の結果をTable 5に示した。

金兎(1997)を参考に各項目内容から、第1因子

を「御利益希求行動」、第2因子を「家族内慣習行動」、第3因子を「信仰」と命名した。具体的には、神のおことばを求めたり神仏に祈願したり、お守りやお札を身のまわりに置いたりすることは、神や仏からの加護を得たり御利益を求めたりする行動と考えられ、第1因子を「御利益希求行動」とした。第2因子について、神仏や先祖に関するものを日常生活に取り入れることは家族や一族のならわしと言えることから「家族内慣習行動」とした。第3因子は、

自ら宗教に関心を持ち、その宗教特有の活動を行うことから「信仰」とした。

また、信頼性を検討するため、宗教的行動尺度全体と各因子についてクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、第1因子は、大学生が $\alpha=.81$ 、成人は $\alpha=.78$ 、第2因子は、大学生が $\alpha=.79$ 、成人は $\alpha=.73$ 、第3因子は、大学生が $\alpha=.60$ 、成人は $\alpha=.79$ 、そして尺度全体では大学生が $\alpha=.80$ 、成人は $\alpha=.74$ であり、内的整合性が確認された。

Table 5 大学生と成人における宗教的行動尺度の因子分析

	大学生				成人			
	I	II	III	共通性	I	II	III	共通性
<b>御利益希求行動</b>								
6. この1~2年の間に、おみくじを引いたり、占いをしてもらったりしたことがある	<b>.870</b>	-.029	-.021	.458	<b>.715</b>	-.049	.204	.706
5. この1~2年の間に、身の安全や商売繁盛、学業成就などを祈願しに行ったことがある	<b>.800</b>	.129	.124	.575	<b>.790</b>	.174	-.153	.480
7. お守りやお札など縁起ものを自分の身のまわりにおいている	<b>.739</b>	.244	.071	.661	<b>.753</b>	.268	-.028	.518
4. 初詣に行く	<b>.712</b>	.245	-.026	.567	<b>.804</b>	.145	-.197	.623
<b>家族内慣習行動</b>								
8. 仏壇にお供え物をする	.170	<b>.826</b>	.237	.672	-.029	<b>.753</b>	.170	.556
3. 墓参りをしている	.170	<b>.795</b>	-.022	.757	.251	<b>.669</b>	.087	.639
2. 先祖の写真を見て、お祈りをする	.131	<b>.677</b>	.315	.611	.088	<b>.617</b>	.302	.596
9. 神棚に手を合わせる	.152	<b>.579</b>	.406	.767	.213	<b>.808</b>	-.033	.677
<b>信仰</b>								
10. 宗教に関する新聞やパンフレットを読む	.041	.062	<b>.768</b>	.523	-.045	.184	<b>.821</b>	.709
11. ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている	.099	.172	<b>.760</b>	.595	-.141	.207	<b>.847</b>	.699
1. 特定の信仰する宗教がある	-.063	.248	<b>.627</b>	.616	.030	.039	<b>.788</b>	.781
因子負荷量平方和	2.56	2.34	1.90		2.49	2.25	2.25	
累積寄与率	23.29	44.55	61.84		22.62	43.08	63.49	

世代と性別要因からみた宗教的行動の違い

宗教的行動尺度における年齢（大学生・成人）と性別の影響を検討するために、2要因の分散分析を行い、その結果をTable 6に示した。

総得点と「御利益希求行動」について、性別において有意な主効果が認められ（総得点： $F(1, 190) = 10.73, p < .01$ 、「御利益希求行動」： $F(1, 190) = 4.41, p < .05$ ）、男性より女性の方が高い値を示した。「家族内慣習行動」についての交互作用は認められなかったが、年齢と性別においてそれぞれ有意な主効果が認められた（年齢： $F(1, 190) = 42.41, p < .001$ 、性別： $F(1, 190) = 8.12, p < .01$ ）。「信仰」では、性別で有意傾向の主効果が認められ、また交互作用が有意であった（主効果： $F(1, 190) = 3.57, p < .10$ 、交互作用： $F(1, 190) = 3.98, p < .05$ ）。「信仰」に認められた交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、成人において女性の単純主効果が有意であり（ $F(1, 190) = 5.27, p < .05$ ）、また女性においては成人の単純主効果が有意であった（ $F(1, 190) = 7.74,$

$p < .01$ ）。以上より、男性より女性において宗教的な行動が見られ、神棚や仏壇に供物を捧げるような家庭内での宗教活動は、大学生よりも成人において行われる傾向にあることが明らかになった。また、成人女性において、特定の宗教を持っていると認識し、その宗教特有の活動を行う傾向にあることが明らかになった。

宗教的行動尺度とPTGI-Jの相関

宗教的行動とPTGとの関係性を検討するために、Pearsonの積率相関係数を算出したところ、Table 7に示したように大学生の宗教的行動尺度の総得点とPTGI-Jの総得点との間に弱い正の相関が認められた（ $r = .28, p < .01$ ）。そして、大学生の宗教的行動総得点とPTGI-Jの各因子との間にも弱い正の相関が認められたことから、やや弱い関係ながらも宗教的活動を行う傾向にある大学生ほどPTGが高いことが示唆された。また、大学生の「御利益希求行動」とPTGI-J総得点（ $r = .24, p < .01$ ）、「他者との関係」

( $r=.27, p<.01$ ), 「新たな可能性」( $r=.23, p<.01$ )との間にもそれぞれ弱い正の相関が認められた。以上のことから、やや弱い関係ながらも、占いやおみくじに興味を持ったりお守りを身につけたりする傾向にある大学生ほど、PTGI-J総得点と「他者との関係」「新たな可能性」が高くなることが明らかになった。

一方、成人においても、宗教的行動尺度の総得点と「精神的(スピリチュアルな)変容および人生に対する感謝」( $r=.33, p<.01$ )との間に弱い正の

相関が認められた。また、成人の「信仰」とPTGI-J総得点( $r=.27, p<.05$ ), 「他者との関係」( $r=.27, p<.05$ ), 「精神的(スピリチュアルな)変容および人生に対する感謝」( $r=.40, p<.01$ )との間に弱い正の相関が認められたことから、特定の宗教を信仰し、修養する傾向にある成人ほど、PTGI-J総得点と「他者との関係」「精神的(スピリチュアルな)変容および人生に対する感謝」が高いことが明らかになった。

Table 6 宗教的行動に対する分散分析結果

	大学生		成人		世代	性別	交互作用
	男性	女性	男性	女性			
	N		N		F値(df=1,190)	F値(df=1,190)	
総得点(11項目)	12.46 (6.38)	14.88 (5.78)	12.26 (6.23)	16.26 (5.67)	0.37	10.73 **	0.65
御利益希求行動	6.82 (3.84)	8.17 (3.14)	6.42 (3.40)	7.45 (3.46)	0.97	4.41 *	0.08
家族内慣習行動	2.95 (1.99)	3.42 (2.10)	4.84 (3.10)	6.60 (2.95)	42.41 ***	8.12 **	2.73
信仰	1.21 (1.60)	1.18 (1.72)	1.00 (1.70)	2.21 (2.61)	1.72	3.57 †	3.98 *

注) ( )内は標準偏差, \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , † $p<.10$

Table 7 宗教的行動尺度とPTGI-Jの相関

PTGI-J	宗教的行動							
	総得点		御利益希求行動		家族内慣習行動		信仰	
	大学生	成人	大学生	成人	大学生	成人	大学生	成人
総得点(18項目)	.28**	.22	.24**	.14	.17*	.06	.10	.27*
他者との関係	.26**	.24	.27**	.16	.13	.07	.07	.27*
新たな可能性	.25**	.11	.23**	.07	.13	.03	.04	.15
人間としての強さ	.22*	.01	.14	.03	.16	.12	.11	.09
精神的(スピリチュアルな)変容 および人生に対する感謝	.26**	.33**	.17	.15	.21*	.17	.17*	.40**

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

## 考 察

### PTGにおける性別と年齢要因の影響

本調査では、PTGにおける年齢の影響が全く認め

られなかった。年齢に関係なくPTGが得られるということは、年齢による成長とPTGが示す成長の性質が全く異なっており、単なる発達の成長によってPTGが生じるのではないことが示唆される。

また、本調査では、PTGにおける性別の要因によ

る違いはほとんど認められないことが明らかとなったが、PTGの下位尺度の1つである「人間としての強さ」において性別の要因による違いが認められた。男性より女性の方が、物事のいかなる結末をも受け入れ、困難に対して自分で対処していけることに気づき、思っていた以上に自分が強い人間であるということを見出す傾向にある者が多いことが明らかとなった。一方、日本人大学生を対象としたTaku et al. (2007)の結果では、PTGにおいて全く性差が認められないことを報告している。Taku et al. (2007)の調査対象者は大学生男性が124名、大学生女性は188名であり、女性の割合が若干多いが、本調査の大学生男性が61名、大学生女性が72名で、協力者の男女比に大差はないと思われる。本調査では、PTGにおける年齢の有意差は認められなかったが、「人間としての強さ」について年齢で比較すると、大学生男性 (Mean=5.79) と大学生女性 (Mean=7.67) より成人男性 (Mean=6.47) と成人女性 (Mean=8.19) の方の得点が高い。Taku et al. (2007)の結果では、「人間としての強さ」の平均得点が6.65であり、本調査の大学生 (Mean=6.73) と比較すると大差はないが、本調査の成人と比較すると成人 (Mean=7.33) の方がやや高いことが明らかである。成人の調査協力者は、男性が19名、女性が42名であり、成人男性の人数の少なさが「人間としての強さ」の性別に影響を及ぼしたと考えることができるであろう。

#### 出来事の衝撃度とPTG及び性別と年齢要因の影響

体験した危機について、大学生は「自己」が、成人は「学校・職場」が多かった。大学生において「回避」が有意に高いことから、青年期による自己同一性を確立する過程としての危機が多く、それが傷つきやすさとして回答された可能性が考えられる。一方、成人は対人関係での危機が多いことが推察されることから、体験した危機の時期に大差はないが、出来事の体験の質や衝撃の意味が異なる可能性が考えられる。

次に、出来事の衝撃度とPTGの関連について、出来事の衝撃が強いほどPTGが高くなる傾向にあるという結果が得られた。つまり、出来事の衝撃が強いほどその人がもっていた世界観の崩壊がより大きくなる可能性が考えられ、PTGの生起につながることを示唆される。出来事の衝撃度の性別要因について、男性より女性において得点が高いことが明らかになった。ジェンダーとストレス研究において、女性は男性より非言語的コミュニケーションを扱う能

力が高く、男性は女性より情緒状態を隠す能力が高いことが報告されている (廣川, 2006)。男性よりも女性の方が出来事からの衝撃を受けやすく出来事によって生じたネガティブな感情を表現する傾向にある者が多く、女性よりも男性の方がネガティブな情緒を隠す傾向にある者が多いことから、女性の衝撃度が高くなった可能性が考えられる。また、成人より大学生の方がその出来事に関するものを回避する傾向にあることから、出来事の衝撃度において性別や年齢が影響を及ぼす一方で、PTGに至る過程には性別や年齢が影響を及ぼさないとと言える。

本調査では、Tedeschi & Calhoun (1996)の結果により出来事を体験した時期を「過去5年以内」に限定したが、過去5年以上前の出来事を報告した調査協力者の「トラウマになるような重大な出来事によって生じたつらく苦しい感情は当時の衝撃の強さのまま今も存在する」という記述から、どんなに時間が経過してもその当時のネガティブな感情を明確に想起することが可能であることが推察された。Yalom & Lieberman (1991)は、出来事の体験によって生じたネガティブな感情を持ち合わせながらもポジティブな心的変化が見られることを指摘している。しかしながら、本調査の出来事の衝撃度において本来の教示と異なり、過去にさかのぼって想起する形での実施を試みたため、現在もそのネガティブな感情が残っているとは言え切れない。また、その当時の状態と調査時の状態とが混在している可能性も考えられる。一方、Taku et al. (2007)は本来の教示で実施しているが、他に体験した危機的な出来事の影響の可能性に言及している。したがって、体験した危機を正しく測定する尺度と、その危機によって生じたネガティブな感情と生じたポジティブな感情を分けて測定する工夫が必要だと思われる。

#### 宗教的行動とPTG及び性別と年齢要因の影響

宗教的行動における性別の要因について、男性より女性の方が宗教に近いことが明らかとなった。また、「家族内慣習行動」については性別だけでなく年齢の影響も見られ、「信仰」では成人女性との関連が認められた。男性より女性の方が、おみくじや占いだけでなくスピリチュアルな体験に関心を持つ傾向にあり、宗教的行動における性別要因の説明が可能と考えられる。また、仏壇やお墓、そして神棚の管理は大学生よりも成人が担い、そして男性よりも女性が務める傾向にあると推察される。成人にとって、先祖は自分自身の (両) 親や祖父 (母) である可能



性が高く、墓参りは家族と再会することであり、感謝を込めて供える供物は家族と共に食する意味が含まれると考えられる。そして、特に成人女性は、家事の一部として家に存在する神棚や仏壇を管理するための作法を学ぶ必要があり、結果的に宗教に関わる機会が多くなることから、成人女性は特定の宗教への所属意識が若干強い傾向にあると考えられる。

宗教的行動尺度とPTGI-Jの相関から宗教的行動とPTGの関連が明らかとなった。大学生において「御利益希求行動」が「他者との関係」や「新たな可能性」と関連が認められたのは、大学生の行動や志向を表していることが推察される。おみくじを引くことや占いに行くことは仲の良い友人や家族と行う楽しいイベントの1つであり、お守りを身につけたり縁起ものを身のまわりに置いたりすることは他者を意識した装飾の一部ともいえ、他者との関わりと考えられる。そして、これから立ち向かおうとする出来事（例えば、学業、恋愛等）に対する加護を期待して、あるいは未来への不安や緊張を和らげることを目的として神仏に祈願することは将来に対する前向きな意思の表れとも考えられ、新たな可能性につながる行動といえる。一方、成人において「信仰」が「他者との関係」と「精神的（スピリチュアル）変容および人生に対する感謝」と関連が認められたのは宗教に関心を持ち、宗教の教えに接する機会が多いことを表していることが推察される。特定の宗教に所属して、そのコミュニティに参加することは、自然に他者に目を向けてよりよく関わろうとする傾向にあると考えられる。つまり、他者と関わり神仏のようなスピリチュアルなものに興味を持つ傾向にある者ほど、PTGが得られる可能性を有することが示唆される。以上より、宗教的行動に性別や年齢が影響を及ぼす一方で、PTGに至る過程には性別も年齢も影響を及ぼさないとと言える。

#### 引用文献

- 飛鳥井望（1999）. 改訂出来事インパクト尺度（IES-R; Impact of Event Scale-Revised）松井豊（編）心理測定尺度集Ⅲ サイエンス社 pp.120-124.
- Bower, J. E., Kemeny, M. E., Taylor, S. E., & Fahey, J. L. (1998). Cognitive processing, discovery of meaning, CD 4 decline, and AIDS-related mortality among bereaved HIV-seropositive men. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **66**, 979-986.
- Calhoun G. L. & Tedeschi R. G. (2006). *Handbook of Posttraumatic Growth — Research and Practice*. Routledge Inc., part of Taylor & Francis Group LLC.
- 宅香菜子・清水研（監訳）（2014）. 心的外傷後成長ハンドブック——耐え難い体験が人の心にもたらすもの. 医学書院.
- Costa, P. T., & McCrae, R. R. (1985). *The NEO Personality Inventory Manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- 廣川空美（2006）. ジェンダーとストレスに関する心理学的研究 ふくろう出版.
- 金児曉嗣（1997）. 日本人の宗教性 オカゲとタタリの社会心理学 新曜社.
- Park, C. L., Cohen, L. H., & Murch, R. L. (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, **64**, 71-105.
- Parkes, C. M. (1971). Psycho-social transitions: A field for study. *Social Science and Medicine*, **5**, 101-115.
- Powell, S., Rosner, R., Butollo, W., Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2003). Posttraumatic growth after war: A study with former refugees and displaced people in Sarajevo. *Journal of Clinical Psychology*, **59**, 71-83.
- 坂口幸弘（2002）. 死別後の心理プロセスにおける意味の役割—有益性発見に関する検討— 心理学研究, **73**, 276-281.
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之（校注）（2003）. 萬葉集4 新日本古典文学大系. 岩波書店. 巻19-4260.
- Taku, K., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Gil-Rivas, V., Kilmer, R. P., & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. *Anxiety, Stress, & Coping*, **20**, 353-367.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, **9**, 455-471.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2004). Posttraumatic growth: Conceptual foundations and empirical evidence. *Psychological Inquiry*, **15**, 1-18.
- Weiss, T., & Berger, R. (2006). Reliability and validity of a Spanish version of the Posttraumatic Growth Inventory. *Research on Social Work Practice*, **16**, 191-199.
- Yalom, I. D., & Lieberman, M. A. (1991). Bereavement and heightened existential awareness. *Psychiatry*, **54**,

334-345.

#### 付 記

本論文作成にあたり、温かく丁寧なご指導を頂戴しました馬場天信教授に深く感謝申し上げます。また、本調査にご協力くださった皆様に心より御礼を申し上げます。なお、本論文は追手門学院大学大学院心理学研究科に提出した修士論文（2010）の一部を加筆・修正したものである。

